

## 五、パネリストによる問題提起(2)

### 過ぎゆかないナショナリズム

瓜生洋一

はじめに―問題提起―

西欧におけるナショナリズムの現状を見ますと、冷戦構造の崩壊以後、断片的でありながら、従来にも増して重大な要素として復活しつつあるように思われます。いわば、「過ぎゆかないナショナリズム」ともいえる状況にあるように思われます。なぜ、かくもナショナリズムが強固な根を持っているのか、という問題だけに、本日のコメントを限定したいと思います。特に、私は、この問題を歴史の角度から、それもナションが歴史的にどう形成されたか、という視点からではなく、ナションがどのように発見され、どのように機能したか、という視点から見ていこうと思うのです。この方法は、因果関係を逆転させるものでありますから、少々こなれていない部分も多いかと思いますが、ご容赦願いたいと思います。

#### 一九世紀後半の辞書から

まず、ナショナリズムが、巨大な姿をとって現れた一九世紀後半のフランスで、ナションがどのように定義されていたかを見てみましょう。その手がかりとして、通称一九世紀ラールスと呼ばれる百科辞典をひもといてみます。ナ

シヨンの項目が掲載されている巻は、一八七四年に刊行されたものです。ナシヨンは、*nasci*つまり*naitre*（生まれる、生み出す）という言葉から由来したもので、「同一地域に居住し、同一の出自、または長期にわたる共通の利害を有する・あるいは類似した習俗、特に同一の言語を有する人間集団（家族など）」と定義されています。このような定義の底には、広大な広がりの中で生活している数多くの人々、しかもその内容は種々様々な文化的背景を持つわけですが、その人々を同一の集団とみなしたいという意志が働いていることを示しています。家族という単位を出生の同一性でくくることは可能でしょう。しかし、一步その外になりますと、同一性でくくることはかなり無理があると思われるかもしれません。その無理を承知で、一九世紀後半において、かくも同一性が強調されたことに注目してみますと、むしろ異なった集団という意識が強いからこそ、同一性が浮かび上がってきたように思われてなりません。ナシヨンという言葉は、同一性を強調することによって、差異を創出する構造を持っているからこそ、この時代に再発見され、大いに使用されたのです。

一九世紀後半のフランスといえば、ドイツとの戦争に敗れ、中央の権威はがた落ちとなり、地方がそれぞれの価値に目覚めていく時代であります。第三共和政は、この難局を切り抜けようとして、地方直轄体制を創るため官選知事を派遣し、初等中等教育の世俗化<sup>II</sup> 国家教育体制の編成に乗り出します。さらに、一九世紀前半から明らかになったアフリカ、特に北アフリカ、インドシナの植民地化に全力を傾け始めておりました。つまり、フランスは、内部においても、また、外部の世界においても、異なった要素を抱え込み、統合しなければならぬという課題に直面していたわけです。

このことから、いささか強引な結論となりますが、ナシヨンという概念を使用するとき、一方で同一性を基礎に求心的機能が発揮されますが、同時に、他方では、差異を発見し、差異を強調する構造を抱え込むという二重の機能を

持つということをも十分に認識しておかなければならないと思います。この両者の含意は、一方を強調すれば、他方が消失するという性格のものではなく、両者がコインの裏表の関係にあるということを考えておかねばならないということを経験しておきたいと思ひます。

### 革命の中のナシオン

長い間にわたって、フランス革命の時期こそ、ナシオンがその最も光彩陸離たる時期であつたとされてきました。しかし、この時期にこそ、ナシオンという語の二重の・切り離しがたい機能が発見され、多用され、確固とした地位を占めたのでした。たとえば、フランス革命を引き起こす要因の一つとなつたシエイエスの有名な『第三身分とはなにか』を読みますと、ナシオンは、「働く人々」で構成されるとしています。つまり、「働かない人々」特権層は、ナシオンから排除されるわけです。広大な領域に居住する膨大な人々、その文化的歴史的性格を全く異にしている人々を包括する語として、シエイエスはナシオンを発見したのでした。そして、その包括された全体は、同時にある集団を排除する構造を獲得したのでした。フランス革命の中で、ナシオンと並んで発見されたパトリイ祖国という語も、同様の機能を営む語として発見されたのです。元來、パトリは、*pater*、つまり、父から由來する語です。ドイツ語におけるVaterlandにも通じるものでしょう。このナシオンとパトリという包括的語の下に、次々と新しい語が発見されました。アンシアンレジーム以來、王権の側が築き上げてきた父なる国王という語、さらに國民議會はナシオンの母と稱されました。また、父なる国王が逃亡した後は、捨てられた子供同士の結合を兄弟として形象したのです(Fraternité)。このように、一気に國家大に広がる異質なものを同一のものとして形象するため、家族的絆帯を基礎とする語が発見され多用されるようになりました。しかし、同一性の強調は、同時に異質なものを発見する装置でも

ありました。国内における迷信を信ずる「地方の無知蒙昧な」人々、封建制のくびきの下に呻吟する隣国の人々、植民地で奴隷の境遇の中で苦しむ人々、…。これら異質の人々を発見し、自らの普遍的原理の下に統合することは、むしろ同一性の基礎の拡大として観念され、善きこととして是認されていきました。その結果、国内における異質の人々の存在は否定され、中央に帰一する人は賞賛されるけれども、少しでも異なった様相を帯びると抑圧と弾圧の対象となったのです。隣国において、フランスにおける「兄弟」と同じ理念を持つものは、「兄弟」「姉妹」として取り扱われ、フランスへの帰属を決議した人々の要請を受け入れたのでした。さらに、要請がなくとも「あるべき兄弟姉妹」を解放するため、戦争に突入することも辞さないところまできました。一七九二年から一八一五年にわたるヨーロッパ全土を巻き込む大戦争は、家族の拡大として観念されたのです。この「フランス家族」の拡大に疑問を差し挟むものは、異質のものとして排除され、抑圧されることは、当然のこととされたのです。ナポレオンとフランス革命が、同根であり、延長線上にあるというのは、この意味で当然のことといえるでしょう。ナシオンやパトリという輝かしい語は、同一性と差異を発見する装置としての機能から、諸国民を従属させることに何の痛痒も感じない独善的な論理へと転化したのです。

### ナシオンの現在、そして未来

フランス革命、第三共和政と、ナシオン発見の歴史を逆行しながらたどってきて、最後に現在のナシオンの状況を見てみましょう。ヨーロッパが、特にフランスがEUの統合の中で、ナシオンの意識を捨て去り、新たな統合体が生まれる、あるいは、国家という枠組みが相対化され、地域や地方という新たな枠組みが浮上する、という壮大な見通しは、近代国家の悪しき側面をいやというほど見てきたものにとって、希望をかき立てられます。しかし、果たして

ことは、そのように進むでしょうか。ヨーロッパは、そしてフランスは、ナシオンという語の、切り離しがたい二重の機能を放置したまま、統合を語っているのではないのでしょうか。このまま統合を進めば、ヨーロッパ内部に、新たな差異を発見する装置を発明する結果が待っているのではないのでしょうか。一例を挙げれば、フランス人の中にあるワロン系の人々、フランス語系のスイス住民のフランス語に対するペジョラティブな態度はなにを物語っているのでしょうか。同一言語を話すことが、同一性の証左であるならば、この態度は、同一性を発見すると同時に差異を発見していると思われませんか。また、近年日本でも知られるようになったフランスにおける極右の存在は、決してごく一握りの政治集団の突飛な排外主義ではないのです。イスラム系の人々に対するいわれなき暴力の行使は、同一性に帰一しない人々を社会的に排除する差異を発見する装置が、なおも根強く生きていることを証明しています。若い人々の人的交流が急速に進んでいます（観光だけでなく、エラスムス計画などの学生・研究者交流も）、その中での様々な軋轢は、今後も後を絶たないでしょう。

EU統合という壮大な実験は、ナシオンという語を越える言葉を生み出すに至っていません。ヨーロッパの同一性の中に差異をそのまま温存・包含する構造が生み出される危険性を免れていないように思われます。場合によっては、近代国家よりもはるかに緩やかで、幅広い歴史と文化を持つ環地中海諸国による共同体の創設の方が、ナシオンの呪縛から逃れる可能性を秘めているのかもしれない。